戦時期『家の光』の川柳欄の分析－1937 年 5 月～1945 年 11 月－

藤原　亜紀

今回の実習は、大正 14 年に初めて発行され、今なお売れ続けている農家むけの月刊情報誌、『家の光』を題材にして行われました。その中で私は、いわゆる戦時体制のもとでの読者の川柳コーナーをテーマに選びました。具体的には、日中戦争の発端となる盧溝橋事件が発生した昭和 12 年 7 月付近の号ということで、昭和 12 年 5 月号から戦争の終結を昭和 20 年 8 月と考え、20 年 11 月号までを対象にしています。この期間に掲載された全ての川柳をデータにまとめ、戦時中の国民、『家の光』ということで特に農民の意識の変化を探りました。

資料１は、この時期に発表された川柳を全てまとめたものです。この資料から、戦時体制下での農村の暮らしはどのようなものであったかを考察しました。

まず、川柳の横に所々ついている丸は、これは白丸が農村の暮らしが題材のもの、黒丸が戦時中特有の状況が題材のものです。農村らしさ、戦時中らしさの根拠としたキーワードや川柳から読み取れる状況を丸の横に付記してあります。

資料を見ていただくとわかりますが、昭和 12 年 11 月号から川柳のお題がなくなり、黒丸が初めて出てきます。川柳の募集は大体 3 つ前の号で締め切られていたので、ここで詠まれているのは 8 月頃のことだと推測され、日中開戦にともなう意図的な路線変更だったと考えられます。レジュメのほうに今回の報告の簡単な流れを記してありますので、ここからはそちらをご覧下さい。さて、11 月号から黒丸は増加して、、昭和 13 年、14 年には年毎の平均で 70%が戦争に関する川柳になります。昭和 15 年、16 年には 50%を切りますが、17 年以降からは再び盛り返し、約 60%を保ちます。白丸は 13 年には 2 平均.5%と低い値ですが、14 年、15 年は約 10%、16 年以降は 15%付近、特に 18 年には 20%となります。

13 年の初め頃にはニュース映画で身内が映ったことを題材にするなど、ある意味戦争は遠い地で起こっていることで、非日常的なものだった感覚が伺えます。

14 年の新年号には徴兵の身体検査がテーマの川柳が載り、体が丈夫で優秀な兵隊になれることが自慢であったことがわかります。また、5 月に傷痍兵という言葉が出現し、その後帰還した兵隊が題材の川柳は頻繁に掲載されます。彼らの社会復帰や、戦地で傷を負った兵隊への感謝の念が伺えます。

15 年、16 年になると長引く戦争に国民の士気が落ちたのか、黒丸は少し減少します。しかし、16 年の新年号と 2 月号ではそれぞれ黒丸が９つ、８つがいきなり増加します。新年だし気合入れていこうかな、とでも思ったのかもしれません。16 年 7 月には空き地を畑にするよう奨励されたことがわかる川柳もあり、農作物の不足が目立ってきたことが想像できます。

17 年からはまた黒丸が増加しますが、7 月には配給、8 月には長期戦という言葉が初めて出てきます。戦争に対して批判的な態度は見られませんが、食糧増産に励む川柳が目立ち

ます。

18 年には北方や南方の戦闘に言及する川柳が見られ、戦域の拡大がわかります。また、以前から雑誌自体が薄くなり情報量が少なくなっていましたが、3 月号からはとうとう川柳の掲載数もそれまでの 10 首から、6 首か 7 首に減らされます。

19 年には空襲を意味する川柳が目立ちます。また、特別切手や宝くじを買う描写がある一方、節約や供出、配給をテーマにする川柳が見られ、お金はあってもモノがない市中の様子がわかります。

昭和 19 年 12 月号で、川柳の掲載は一度休止します。その後も雑誌自体は 20 年の 1 月号、2、3 月合併号、4,5 月合併号、6 月号、10 月号と出版されますが、川柳コーナーの復活は 11 月号になってからです。4 首だけではありますが、戦争が終わり、時代がかわりつつあることが読み取れます。

こうして全体の流れを見ていく中で、戦争を礼賛したり、それによる制約を明るく受け入れる川柳が多いと感じましたが、これが本当に世間の風潮だったかどうかは分かりません。初期は戦況が良かったことから、いわば戦争ブームが起きていた感がありますが、だんだん戦争に前向きな川柳を国民の士気を煽るために掲載していったのではないか、またはそうするよう指導が入ったのでは、と感じます。

また、農村の暮らしに着目してみると、初期から一貫して兵隊を供給することを喜ぶ川柳が見られます。家族と軍事便をかわしたり、負傷兵を受け入れる描写や、銃後を守る気概が感じられるものが多くあり、どうしても戦地との距離感はありますが、精一杯この戦争を支援したい気持ちがうかがえます。また、戦争も後半になると、食糧増産と子沢山を自分の義務と考え、それを達成することを喜びとする川柳が増えます。今、国のために夜遅くまで増産に励め、生めよ増やせよ、などと言われても受け入れられる人はそういないでしょう。自給率や出生率の上昇の必要は現在の日本でも叫ばれていますが、戦時中と言っていることは同じなのに、時代と大儀が違うとこうも受ける印象が違うものなのです。人材と食料はいつの時代も重要であると確認すると同時に、いつか今の考え方が通じなくなる時代も来るのだろう、と思いました。

（報告レジュメ）　　2007 年 2 月 16 日

藤原　亜紀

（１）題材…『家の光』

大正１４年に現在の農協の前身である産業組合によって創刊され、今なお発行が続く農村向け大衆月刊誌

いわゆる戦時体制のもとでの読者の川柳コーナー

昭和 12 年 5 月から昭和 20 年 11 月号が対象（昭和 12 年 7 月 7 日、盧溝橋事件）

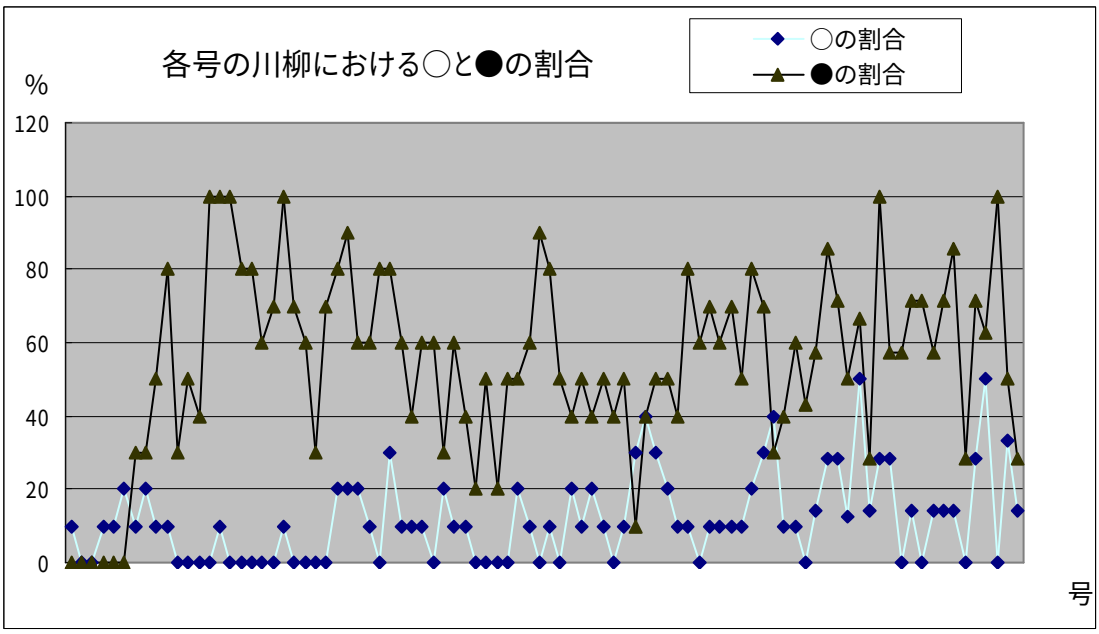
戦時中の国民、特に農民の意識の変化を読み取る

（２）資料１

○…農村が題材のもの　　●…戦時中特有の状況が題材のもの

根拠となるキーワードなどをそれぞれの丸の横に付記

（３）○と●の移り変わり



●の年毎の平均…S13 年、14 年：70%

S15 年、16 年：50%を割る

S17 年以降：約 60%

○の年毎の平均…S13 年：2.5%

S14 年、15 年：約 10%

S16 年以降：約 15%（特に 18 年は 20%）

（４）年毎の状況の変化

13 年

＜戦争＝非日常＞

髭武者の　夫をニュース　映画で見　　（東京　鈴木参良）

五秒間　ニュース映画に　出た倅　　（埼玉　栗田秀四郎）

父ちゃんと　一人子が立つ　ニュース館　　（岐阜　古田義隆）

14 年

＜徴兵＞

「百姓で　あります。」甲種　凛と言ひ　　（栃木　須藤忠平）

検査官　甲種を痛い　ほど叩き　　（東京　熊倉双葉）

召集の　兄にかはつて　餅を搗き　　（埼玉　上原秀男）

＜傷痍兵・帰還兵＞

左手で　この頃書ける　傷痍兵　　（三重　中家喜代子）

武勇談をと　言へば傷兵　笑ふだけ　　（群馬　關初美）

帰還兵　わが女房に　挙手の礼　　（福井　松村嘉寿恵）

16 年

＜空閑地の農地化進行＞

日曜日　前の明地の　夫ぶり　　（福島　佐藤喜代治）

空閑地　今日は女中に　指図され　　（青森　高橋ふさを）

いささかの　庭も今年は　薯の花　　（福島　佐野久男）

17 年

＜「配給」、「長期戦」初出＞

飯事も　判と配給　券を持ち　　（群馬　二宮鶴治郎）

長期戦　ですと見せ合ふ　靴の穴　　（樺太　松村三男）

18 年

＜北方、南方への戦域拡大＞

寒いなと　言へば叱られる　アリューシャン　　（埼玉　田中哲男）

ソロモンが　はっきり見える　蟲眼鏡　　（福島　磯部九郎太）

植えながら　北の護りも　言い聞かせ　　（石川　吉光政雄）

19 年

＜空襲＞

妻の声　初めて知つた　焼夷弾　　（北海道　松尾秀夫）

爆弾も　受け止める気で　もんぺ立ち　　（山口　弘中あや子）

空守る　砂水梯子　家の武器　　（茨城　出澤雅敏）

＜金余り、物不足＞

肉刺の手で　米英撃てる　切手買う　　（佐賀　小ヶ倉征光）

当たり籤　御国へすまぬ　やうな顔　　（香川　平井ユズル）

供出の　車と知つて　子等も押し　　（島根　大塚）

子の寝顔　それでおいしい　特配酒　　（前橋　若林とらを）

袖裁つて　もう春風に　用はない　　（三重　瀧原あきら）

20 年 11 月号

＜時代の変化＞

女でも　いいさいいさと　実家の母　　（凡太郎）

旅帰り　土産の上を　さはらせる　　（牟風子）

初対面　名刺と顔を　見くらべる　　（峰の犀）

これだけの　野菜へ主婦と　しての知恵　　（選者）

（5）まとめ

・戦争を礼賛したり、それによる制約を明るく受け入れる川柳が多い

→本当の世間の風潮だったかどうかは不明

初期は戦況が良かったことから、いわば「戦争ブーム」のよう

国民の士気を煽るために上述のような川柳を掲載したのではないか

・農村の暮らし

兵隊を供給することの喜び、軍事便、負傷兵の受け入れ、銃後を守る気概。

→戦地との距離感、日本の勝戦のため役立ちたい気持ち

増産と出産への義務感、達成の喜び。

資料１

昭和 12 年 5 月　P77　題「汐干狩」「花見」

貝の名を　母に教える　汐干狩　　（山形　林三龍）
汐干狩　蟹に驚く　白い足　　（北海道　嶋田敏夫）
握り飯　立ちながら食ふ　汐干狩　　（福岡　今村洋一）
百姓の　花見は鍬の　休む時　　（埼玉　吉川徳造）〇百姓、鍬
汐干狩　思はず叫ぶ　腕時計　　（山口　未舛春帆）
汐干狩　子は軍艦に　気を取られ　　（神奈川　中島大尾）
花の山　仮装困った　人に会ひ　　（長野本藤清之丞）
肩車　叱られさうに　花へ立ち　　（大阪　鳥居柳笑）
花の山　母は景気を　見て戻り　　（満州国　瀧澤貞男）
汐干狩　うつかりよその　尻を呼び　　（東京　門井斗人）

昭和 12 年 6 月　P67　題「数」「雨具」

母親の　自慢は数を　算えさせ　　（大阪　鳥居柳笑）
十二時を　数えて急に　腹が立ち　　（福島　関根真砂子）
上役の　傘へ入れば　肩が濡れ　　（北海道　田中戦朗）
新妻へ　眩しく動く　鳩の数　　（静岡　都築橙一郎）
九千萬　たつた一人の　母がゐる　　（山形　小松たつる）
又一へ　戻る手毬の　よくつけて　　（山梨　雨宮月兎）
洗濯の　数を誉めあふ　垣根ごし　　（台湾　頴川一夢）
傘持つて　来た妻皆に　囃される　　（愛知　星野昌明）
先生の　傘と戻つた　子の機嫌　　（宮城　大友眞一郎）
国民の　数に入った　初幟　　（東京　馬場如水）

昭和 12 年 7 月号　P121　題「娘」「荷」

嬉しさう　子が荷の中で　戻る野路　　（和歌山　西岡重三）
事務服を　脱げば娘の　肩となり　　（富山　水野たかを）
よく笑ふ　娘叱れば　なほ笑ひ　　（秋田　花緒加　俊）
着更の娘　鏡の中を　歩いてる　　（岡山　岡田南畝）
里帰り　娘の頃の　声が出る　　（兵庫　岩崎千木高）
帰省した　荷を持ちたがる　子と帰り　　（青森　上原をさむ）
押売の　荷を憎らしく　送り出し　　（神奈川　春洞碌）
断髪に　なつて家出の　娘は帰り　　（香川　加藤良徳）
荷車の　帰りを子供　乗りたがり　　（長野　竹内有）
麗かな　村で荷車　押してやり　　（熊本　前田春男）

昭和 12 年 8 月号　P59　題「新夫婦」「犬」

泣き止まぬ　子へあてのない　犬を呼び　　（東京　吉田松菊）
初めての　野良が眩しい　新夫婦　　（愛媛　澤田忠男）〇野良
いい着物　よろこぶ犬を　逃げまはり　　（長野　島田虎三）
新夫婦　ここから別れ　社へ急ぎ　　（宮城　佐藤源五郎）
世の中に　美人はゐない　もらひ立て　　（福島　高橋源吉）
犬の尾に　何はなくとも　迎へられ　　（東京　渡邊誠夫）
新妻へ　手を貸してやる　重い物　　（埼玉　石井福寿）
犬の子へ　思ひ思ひの　名が出来る　　（朝鮮　金子美津坊）
ついて来る　犬に約束　して返し　　（島根　藤川松夫）
新夫婦　二人の智慧で　棚を吊り　　（和歌山　小谷六三）

昭和 12 年 9 月号　P127　題「蟲」「ひげ」

蟲の音に　夜が更けてゆく　講義録　　（樺太　石井光也）
死にさうな　声へ毛虫が　木から落ち　　（山梨　監島一兆）
村中が　髭面になる　農繁期　　（長野　有賀黙笑）〇農繁期
頬杖の　思案は髭を　もてあそび　　（石川　山下静時）
髭のある　武士が可愛い　児童劇　　（群馬　石井博正）
叱られる　社員に髭が　見事過ぎ　　（富山　水野たかを）
これ以上　出来ない顔で　髭をそり　　（長崎　山邊一三六）
髭のある　馬鹿を阿母　もてあまし　　（茨城　遅塚雨村郎）
帰省した　耳へ本当の　蟲が鳴き　　（鹿児島　西華水）
初めての　髭先生に　からかはれ　　（岡山　川手徳一）

昭和 12 年 10 月号　P175　題「籠」

重かった　籠は一度に　息を吐き　　（埼玉　土屋晴太郎）
農繁期　子供を守る　藁の籠　　（大阪　御木茂垣）〇農繁期
蛍籠　つるす所は　子にまかせ　　（岐阜　相宮渓舟）

蟲籠へ　いつか話が　移つてゐ　（新潟　石丸九五）
人の籠　覗いてみたい　栗拾ひ　（福岡　今村貞夫）
大漁は　黙つて魚籠を　つきつける　（香川　植田呑気樓）
鳥籠へ　ラヂオ体操　影が伸び　（石川　嵯峨茂路）
桑籠へ　今年の希望　摘んで入れ　（朝鮮　金子美津坊）〇桑籠
早籠の　お尻を笑ふ　時代劇　（新潟　斉藤忠司）
籠の子の　嬉しさになる　昼休み　（群馬　安原獵人）

昭和 12 年 11 月号　P95

刈り上げた　陽の夕焼を　夫婦で見　（香川　嶺龍介）
握り飯　一つ絶景　から転げ　（長野　池上仁人）
世辞と知り　ながら嬉しい　子の器量　（福島　高橋源吉）
沿線の　案山子も持つた　日章旗　（愛知　大見祐策）〇沿線　●日章旗
千人力　僕も書いたと　子の日記　（奈良　田中佐治郎）
珍客に　されて困つた　足の甲　（東京　野口晴男）
面会に　行けば兄さん　挙手の礼　（岐阜　松原録郎）●挙手の礼
からかへば　笑つて睨む　年になり　（静岡　畑微苦笑）
珍客に　母も出てくる　珍しさ　（東京　大海貫一）
白い手も　手伝つてゐる　慰問品　（愛媛　家久重之）●慰問品

昭和 12 年 12 月号　P65

万歳の　真中に立つ　肩の幅　（東京　荻原乙雨）●万歳
千人針　男も結び　たく通り　（熊本　西山一男）
生まれ出る　命産婆の　声となり　（朝鮮　金子美津坊）
百姓の　忙しさ見ろと　いい天気　（岩手　金矢生華）〇百姓
軍歌ちと　子に直されて　歌つてる　（東京　片山保昌）●軍歌
女の目　男盛りを　見送る目　（山形　管廼松風）
物干しで　歌ふ女中の　声に惚れ　（島根　福田新市）
枕から　落ちて子供は　夢の中　（徳島　前野五穂）
慰問品　戦ふ人の　顔が見え　（千葉　菰田藤吾）●慰問品　戦う
子の運ぶ　稲束小さく　して渡し　（埼玉　川村錦雪）〇稲束

昭和 13 年新年号　P147

元日の　電話いきなり　おめでたう　（静岡　四上四郎）
汽車見れば　子は万歳を　叫ぶ癖　（愛媛　石川水歩）●万歳
朗かさ　献金の子を　背に出かけ　（東京　本多鏡丸）●献金
いま父は　このへんにゐる　北支地図　（朝鮮　桑野青路）●北支
気象台　こんな天気に　傘持たせ　（千葉　堀切まさを）
お書初め　この子に血筋　争えず　（岡山　藤原道子）
睨めつこ　して面白い　置炬燵　（三重　中西蝶夢）
非常時の　案山子ここでも　銃を持ち　（静岡　種石完一）〇案山子　●銃
結初めに　笑ひ盛りが　咲き揃ひ　（高知　山邊林晴）
万歳の　手は持つている　物を上げ　（長野　有賀黙笑）●万歳

昭和 13 年 2 月号　P157

遺家族の　畑に青年　団の旗　（静岡　山崎眞砂夫）●遺家族
松の内　足袋美しい　裏を見せ　（東京　岡田藻都）
非常時の　街頭らしい　雪達磨　（三重　山本慶記）●非常時
出征日　初めて母の　手を握り　（山口　石井傅坊）●出征
髭武者の　夫をニュース　映画で見　（東京　鈴木参良）●髭武者
やあ君も　来てゐるのかと　特務兵　（愛媛　久保松陽）●特務兵
年賀状　内職ほどに　広げられ　（北海道　高木犂月）
支那の地図　社長も覗く　いい機嫌　（埼玉　夢川邦）●支那
黒髪を　束ね銃後の　鍬を執り　（東京　平川淳）〇鍬　●銃後
戦線の　息子に負けぬ　力瘤　（大阪　南條寛太郎）●戦線

昭和 13 年 3 月号　P117

転んでも　いい服装にして　雪へ出し　（東京　和田勇）
故郷の子を　思つて支那の　子に領かち　（秋田　成田軍人）●支那
男親　鏡を見せて　子をあやし　（愛知　佐野肇）
はね炭へ　娘は仰山な　音を立て　（長野　後藤生人）
頬張つた　餅日本の　味がする　（群馬　朝香敏雄）
献金の　後姿は　見送られ　（青森　上原をさむ）●献金
チンドン屋　わが子を見てる　歩き振り　（大阪　溝口一波）
隊中を　廻る手紙は　女文字　（熊本　西山一才坊）●隊中

双肌に　寒さも知らぬ　適齢期　　（愛媛　徳本富子）
飾り窓　買ひたい顔が　入れ替り　　（和歌山　野上比呂一）

昭和 13 年 4 月号　P109

塹壕の　夢へ励ます　母が立ち　　（兵庫　梶谷弘美）●塹壕
参拝の　コースに続く　団体旗　　（大阪　御木茂桓）
隊長も　共に泣いてる　慰問文　　（福岡　中川進）●隊長、慰問文
歯を磨き　ながらニュースへ　耳を立て　　（石川　中邨淑夫）
決死隊　待つてたやうな　顔ばかり　　（愛媛　西村金作）●決死隊
良心の　強さを知つた　拾ひ物　　（和歌山　桑原悌二）
言ひ負けて　から新聞を　読み直し　　（朝鮮　村上徹郎）
兵隊に　なれと頬ずり　される孫　　（新潟　渡邊思洋）●兵隊
軍国の　子に潔い　花吹雪　　（愛知　倉野英麿）●軍国

昭和 13 年 5 月号　P77

武者髭が　微かにふるふ　子の手紙　　（北海道　岩田義高）●武者髭
人の子の　やうに抱いてる　令夫人　　（大阪　佐野一太郎）
泣き止まぬ　子に鉄兜　持つてくる　　（新潟　小熊久一郎）
出征の　わが子に負けぬ　力瘤　　（滋賀　河合瓢舟）●出征
朗かな　日曜父が　馬になり　　（宮城　小室けさま）
トーチカの　代りになつた　置炬燵　　（山形　長谷川清一）
五秒間　ニュース映画に　出た倅　　（埼玉　栗田秀四郎）●ニュースに出征した息子が映ったもの
台所の　手際を膳に　して運び　　（島根　福田信蔵）
ひょつこりと　便りをよこす　大手柄　　（東京　佐藤破傘人）
流弾　せせら笑つて　飯にする　　（静岡　久保田桂一）●流弾

昭和 13 年 6 月号　P173

父ちゃんと　一人子が立つ　ニュース館　　（岐阜　古田義隆）●ニュースに出征した父親が映ったもの
玩具屋を　出た軍刀は　先に立ち　　（静岡　都築橙一郎）●軍刀
抱き上げて　献金させる　町の角　　（北海道　高澤金一）●献金
留守隊を　口惜しがらせて　勝ち続け　　（東京　仲居笑仏）●留守隊、勝ち
日の丸を　立てて晴れてる　支那の家　　（岩手　東山重雄）●支那
子守唄　父は軍歌の　ほか知らず　　（山梨　中村進）●軍歌
慰問品　故郷の見える　物ばかり　　（岩手　新井田誠）●慰問品
子を抱いて　胸の勲章　欲しがらせ　　（北海道　中野静人）●勲章
蓄音機　軍国の子の　歌に負け　　（茨城　河野英美）●軍国
献金に　村長の礼　痛み入り　　（鳥取　山本久太郎）●献金

昭和 13 年 7 月号　P127

日の丸が　立って支那民　みんな無事　　（秋田　安田清）●支那
朗かに　慰問袋を　覗き合ひ　　（東京　正木時夫）●慰問袋
荒鷲の　母はモンペの　まま撮られ　　（東京　岡村英二）●荒鷲、もんぺ
愛国の　行進曲に合はせ　上げる鍬　　（北海道　池田平蔵）〇鍬　●愛国
月を背に　重き任務の　歩哨戦　　（埼玉　金子挿昌）●歩哨戦
針の手を　休めて軍歌　子に習ひ　　（岡山　新古坊）●軍歌
よくやつて　くれた軍服　とり巻かれ　　（大阪　丹波年尾）●軍服
凱旋の　手柄は髭が　物語り　　（東京　斉藤大勝）●凱旋
慰問袋　仮名の字が出て　兵士泣き　　（宮城　千葉辰馬）●慰問袋、兵士
もの凄い　鼾で眠る　決死隊　　（茨城　遲塚うそん郎）●決死隊

昭和 13 年 8 月号　P128

軍事便　父になつてる　我を知る　　（福岡　中山茂生）●軍事便
心から　勇士慰問の　声に酔い　　（岡山　山本岡目）●勇士、慰問
万歳で　出た駅万歳　で帰り　　（秋田羅々酔京）●万歳
駄々つ子の　やうに戦場　運ばれる　　（青森　上原をさむ）●戦場
凱旋は　噛りつかれて　共に泣き　　（福岡　中村梗太郎）●凱旋
兵籍が　あつて貧乏　羨まれ　　（愛媛　宇佐美爲助）●兵籍
武者髭に　ぽつたり落ちる　子の手紙　　（千葉　木島恭四郎）●武者髭
スクリンへ　歯並が目立つ　決死隊　　（廣島　東かな子）●決死隊
部隊長に　済まないやうな　髭になり　　（兵庫　石田稔郎）●部隊長
軍事便　ほら父さんと　子に持たせ　　（三重　米倉玉枝）●軍事便

昭和 13 年 9 月号　P145

雨宿り　一番後に　ス・フが出る　　（北海道　本間旗君）
決死隊　男と生まれ　嬉し泣き　　（群馬　根岸顕治）●決死隊
爆撃を　終えてしんみり　蟲を聞き　　（熊本　森坂清輝）●爆撃

玩具屋で　母親怖い　顔もする　　（福島　馬場忠司）
戦友が　ぐるり取りまく　娘の写真　　（新潟　小熊久一郎）●戦友
陽に焼けて　戦地に行った　子を思ひ　　（静岡　橋本亮一）●戦地
商用に　来て歓送の　人になり　　（富山　黒田初夢）●偶然出征を見送る
手を拭いて　母も駆け寄る　軍事便　　（東京　斉藤清汀）●軍事便
ちよぴりと　支那語覚えて　凱旋し　　（朝鮮　桑野青路）●支那、凱旋
涼み台　敵機のやうに　蛍くる　　（石川　中邨淑夫）●敵機

昭和 13 年 10 月号　P104

陣中の　芸に間に合ふ　鉄兜　　（長野　有賀黙笑）●陣中
廃物へ　器用に母の　手が動き　　（大阪　鳥居柳笑）
次ぎ次ぎと　囲炉裏を廻る　軍事便　　（滋賀　富山青雲子）●軍事便
決死隊　命があつた　顔と顔　　（東京　皆藤二水）●決死隊
汗になる　水皇軍の　喉が鳴り　　（静岡　橋本亮一）●皇軍
感状へ　列で泣いてる　生き残り　　（千葉　田中茂夫）●感状
子の寝言　うつかり夜業　返事する　　（石川　水口天乃）
荒鷲は　還れば記者に　とり巻かれ　　（愛知　咲元詩朗）●荒鷲
国境を　出て君が代に　涙する　　（香川　頼富正信）●海外の戦地で国歌を聞く
慰問文　書けない母の　意も伝え　　（兵庫　尾内英直）●慰問文

昭和 13 年 11 月号　P145

日の丸の　下で捕虜は　よく食らひ　　（東京　尾加保文）●捕虜
嬉しさは　慰問袋に　挙手の礼　　（中支派遣軍　江口愛市）●慰問袋、挙手の礼
日曜日　子の面白い　癖を知り　　（岐阜　西村緑映）
お土産は　それぞれ音の　する玩具　　（静岡　久保田桂一）
塹壕の　煙草祖国の　味がする　　（兵庫　中原廣治）●塹壕
戦ひが　すんで戦友の名　呼び返し　　（熊本　森坂清輝）●戦ひ、戦友
凱旋兵　支那語交じりで　笑はせる　　（群馬　安原獵人）●凱旋兵、支那
歯磨きの　片手は植木　棚へ行き　　（静岡　新村武夫）
慰問品　思ひ思ひの　顔になり　　（埼玉　金子挿昌）●慰問品
誕生日　夫の年を　ふと数え　　（東京　陸畑半峰）

昭和 13 年 12 月号　P151

陥落を　待つ提灯屋　狭くゐる　　（長野　有賀黙笑）●陥落
部隊長　部下の子供に　泣かされる　　（大阪　芳野俊子）●部隊長
奥様が　ついててス・フを　洗はせる　　（東京　嶺暁梢）
国策へ　ぼろ洋服は　ほつとする　　（宮城　熊谷正志）●国策
あどけない　舞踊に傷も　忘れてる　　（東京　正木時夫）
軍事便　独りで読んで　叱られる　　（静岡　杉山文男）●軍事便
塹壕の　月へ自慢の　喉が冴え　　（愛媛　石川水歩）●塹壕
マラソンの　喘いで来るへ　道が明き　　（岡山　川上二郎）
慰問団　勇士と同じ　髭になり　　（兵庫県　尾内秀直）●慰問団、勇士
読ませたい　子があり仮名の　軍事便　　（岐阜　相宮渓子）●軍事便

昭和 14 年新年号　P75

蔭膳へ　明るく射した　初日の出　　（神奈川　幸保貞夫）●蔭膳
父ちゃんは　何処にゐるのと　九段坂　　（山梨　加藤岩吉）●九段坂（靖国神社に続く坂）
もの言へば　髭から動く　部隊長　　（山口　宵島聖二）●部隊長
戦地から　賀状子の名へ　ちやんと着き　　（東京　中居笑佛）●戦地
戦線の　人に済まなく　出す炬燵　　（京都　四方富士枝）●戦線
噂する　雑煮の膳へ　軍事便　　（東京　赤木良雄）●軍事便
日本の　雑煮を捕虜も　食べてゐる　　（神奈川　嵯峨晃）●捕虜
「百姓で　あります。」甲種　凛と言ひ　　（栃木　須藤忠平）〇百姓　●甲種（徴兵用身体検査の最高評価
故郷の子を　思つて支那の　子を抱き　　（茨城　平田宗作）●支那
国策へ　がつちりと合ふ　母の足袋　　（静岡　松浦澪子）●国策

昭和 14 年 2 月号　P158

寒いなと　言へば出てくる　事変談　　（山口　大中祥生）●事変談
一泊の　勇士に嬉し　家内中　　（兵庫　山田誦雨）●勇士
つはものも　これには困る　針仕事　　（中支派遣軍　江口愛市）
子守唄　軍歌になると　子も勇み　　（神奈川　直樹三二）●軍歌
言ひなりに　なつて嬉しい　子煩悩　　（大阪　澤田昌巳）
雪だるま　国の坊やの　顔になり　　（徳島　本田きくる）
腕相撲　強さどちらも　甲種なり　　（東京　岡村英二）●甲種
お結飯は　肩身が広い　汽車の中　　（新潟　佐藤早城）●白米は贅沢とする雰囲気

子を抱いて　する万歳は　片方の手　　（岐阜　植村いづみ）●万歳
媒酌人へ　モンペの娘　見てもらひ　　（大阪　中尾けんぢ）●モンペ

昭和 14 年 3 月号　P93

子に乳房　ふくませて読む　軍事便　　（広島　山下耕伸）●軍事便
初めての　もんぺ鏡へ　嫁が立ち　　（東京　上野隆之助）●もんぺ
献納機　国旗の渦の　上を舞ひ　　（石川　山下静時）●献納機
故郷の　水のうまさを　支那で知り　　（岡山　清田将一）●支那
退屈な　電車毛糸を　編んで居る　　（島根　河谷金一）
支那の子へ　そつと支那語で　話してみ　　（静岡　久保田桂一）●支那
物差しを　子が持つて出る　雪の朝　　（岐阜　植村いづみ）
正札と　夫の顔を　見くらべる　　（大阪　中尾けんぢ）
午後十時　小僧お風呂で　浪花節　　（群馬　須永久雄）
日の丸の　下で支那の子　よく太り　　（東京　古澤光枝）●支那

昭和 14 年 4 月号　P97

入学の　嬉しさに鳴る　靴の音　　（群馬　安原獵人）
先生と　呼ばれキャラメル　分けてやり　　（中支派遣軍　江口愛市）
堂守りは　花見をよそに　薪を割り　　（東京　水野元）
軍事便　孫に読ませて　灯を囲み　　（福岡　満生傳男）●軍事便
浪花節　椅子から立つと　節になり　　（埼玉　山崎繁吉）
泣きさうな　子に風船は　空に消え　　（東京　不破柳宵）
表忠塔　祖国の空へ　向いて立ち　　（富山　築地白縫）●表忠塔（戦争で亡くなった兵士を祀る塔）
父さんが　写生されてる　日曜日　　（富山　森田貞夫）
凱旋の　父へまぶしく　子は抱かれ　　（埼玉　岸上のぶを）●凱旋
笑はれて　一緒に笑ふ　国訛り　　（埼玉　谷澤繁實）

昭和 14 年 5 月号

戦友に　髪など刈らす　よい日和　　（中支派遣軍　井田余志雄）●戦友
坊やには　絵葉書で来る　軍事便　　（東京　佐藤武成）●軍事便
痛くない　拳固は高く　振り上げる　　（千葉　宮澤俊光）
撮される　遺族仏間へ　坐りかへ　　（鳥取　永栄宗文）●遺族
大陸の　土になります　朝の駅　　（広島　谷口茂規）●大陸（満州？）へ渡る決意
慰問品　馬にやるのを　まづ見つけ　　（東京　櫻井太平）●慰問品
占領の　記念に山の　名が変り　　（三重　高山いづみ）●占領
薬草を　母は摘んでる　ピクニック　　（神奈川　幸保貞保）
左手で　この頃書ける　傷痍兵　　（三重　中家喜代子）●傷痍兵
金策に　来て縁談を　持ち出され　　（北海道　石見利夫）

昭和 14 年 6 月号　P163

落書の　皇軍万歳　怒られず　　（山形　竹田白馬）●皇軍万歳
蔭膳の　粗末を詫びる　農繁期　　（東京　高橋義雄）〇農繁期　●蔭膳
松葉杖　嫁となる娘に　手を取られ　　（東京　斉藤明）●帰還した負傷兵
君も子が　あるかと勇士　打解ける　　（東京　泉ゆたか）●勇士
すべり台　後がつかえる　よい元気　　（埼玉　黒澤一穂）
木炭車　今たちますと　煽いでる　　（徳島　山崎雪堂）
母が言ひ　子が仮名で書く　軍事便　　（福井　岩木岩雄）●軍事便
武勇談をと　言へば傷兵　笑ふだけ　　（群馬　關初美）●傷兵
さまざまの　仕事銃後の　妻が知る　　（鳥取　清水勇蔵）●銃後
飯盒の　うまさへ髭が　邪魔になり　　（東京　宮崎芳雄）●戦地で髭ぼうぼうになり、飯盒で食事

昭和 14 年 7 月号

国策を　論じて屑屋　みな出させ　　（宮崎　松浦弘洋）●国策
爆音へ　届かぬ声を　張り上げる　　（東京　石川芳雄）●爆音
部隊長　ついに笑つた　珍相撲　　（北支派遣軍　重谷正峰）●部隊長
驢馬の背に　中支の春の　麗かさ　　（長崎　小川信市）●中支
深閑と　して家広き　農繁期　　（山形　伊藤樂水）〇農繁期
通訳が　来るまで捕虜と　手で話し　　（静岡　久保田桂一）●捕虜
桑を摘む　もんぺ軍歌の　朗かさ　　（埼玉　高田竹香）〇桑　●もんぺ、軍歌
大陸へ　みんなやる気の　子沢山　　（北海道　横關恵一郎）●大陸、子沢山
軍事便　待つ父がゐる　母がゐる　　（新潟　熊倉青果）●軍事便
行軍に　疲れ荒鷲　仰ぎ見る　　（中支派遣軍　江口登市）●行軍、荒鷲

昭和 14 年 8 月号

いやさかの　声から明ける　新天地　　（満州　曾根田吉松）●満州での新しい生活
みんな寝て　又読んで見る　軍事便　　（福井　大？原千代子）●軍事便

空の魚籠　今日も天気の　せゐにする　　（東京　林ゆたか）
持てるだけ　包んでくれる　里の母　　（愛知　後藤武彦）
蔭膳へ　まづ召し上れ　初西瓜　　（愛知　鈴木元勝）●蔭膳
農繁期　勇士に負けぬ　髭が生え　　（北海道　田中嬉代子）〇農繁期　●勇士
ハンマーに　召集もれの　力瘤　　（福岡　市岡たか子）〇ハンマー　●召集もれ
空つ腹　おかづの想像　して戻り　　（栃木　風野啓司）
角帯へ　馴れぬ小僧の　手が疲れ　　（東京　藤原浅一郎）
万歳が　出来て膝から　手に渡り　　（滋賀　白木花樂）●万歳

昭和 14 年 9 月号

子に習ふ　ラヂオ体操　嬉しそう　　（愛知　水野高次郎）
国債を　買ふ日近づく　夜業の灯　　（福井　岩木岩雄）●国債（戦時国債が大量に発行された）
慰問文　母の言ふだけ　書き切れず　　（滋賀　富山青雲子）●慰問文
ままごとの　蔭膳　盛つてあり　　（岡山　江木都子）●蔭膳
包紙　母は何かと　二度使い　　（和歌山　林公義）
手榴弾　投げた腕だと　早苗投げ　　（岩手　新沼きそふ）〇早苗　●手榴弾
紙芝居　太鼓は町の　子に打たせ　　（鳥取　岡田杜美）
野天風呂　戦地の父を　思い出し　　（埼玉　中島一男）●戦地
子の機嫌　抱き手が二人　待つてゐる　　（静岡　平岡梅吉）
帰還兵　支那語を村に　はやらせる　　（新潟　小熊久一郎）●帰還兵、支那

昭和 14 年 10 月号　Ｐ141

飛行機に　ラヂオ体操　ちと乱れ　　（佐賀　山崎徳次）●飛行機
米俵　差し上げてみる　検査前　　（三重　服部高明）●徴兵用身体検査前の力試し
物干に　竹竿がない　柿の頃　　（京都　碧空三郎）
小休止　故郷へ無事と　走り書き　　（満州　岡田秀夫）●戦地で休み時間に書く故郷への手紙
軍事便　客の挨拶　あとになり　　（群馬　大淵トミエ）●軍事便
手のひらに　更生の豆　また一つ　　（廣島　深本富郎）
初めての　もんぺ鏡へ　尻を向け　　（岡山　楠見正雄）●もんぺ
帰還兵　わが女房に　挙手の礼　　（福井　松村嘉寿恵）●帰還兵、挙手の礼
故郷の夢　醒めれば支那の　蟲が鳴き　　（三重　中西蝶夢）●支那
片仮名の　文字に子供の　伸びを知る　　（中支派遣軍　上所茂）●戦地へ子供から慰問文が届く

昭和 14 年 11 月号

検査官　甲種を痛い　ほど叩き　　（東京　熊倉双葉）●甲種
戦つて　来た髭面で　子をあやし　　（栃木　須藤喜一）●戦つて
稲の出来　二人が征つた　とは見えず　　（石川　横川羽邑）〇稲の出来　●家族から二人出征した
空襲や　母も国家の　一幹部　　（福井　井上久三郎）●空襲
慰問品　子があると言ふ　捕虜にわけ　　（愛媛　石川信之）●慰問品、捕虜
大陸の　土になりたい　地図を張り　　（福井　岩木岩雄）●大陸に渡る志
仏壇へ　ちやうどになつた　貯金箱　　（愛知　柴田笠秋子）●戦争に役立てるための貯金
畦に泣く　子へ張りきつた　乳房来る　　（栃木　山園貴代史）〇畦
この家も　俵編む影　夜の障子　　（神奈川　佐久間太郎）〇俵
勤労の　常務カメラに　をさめられ　　（大阪　永並さいち）●勤労者を報道し国民の士気を煽る

昭和 14 年 12 月　Ｐ189

召集の　兄にかはつて　餅を搗き　　（埼玉　上原秀男）●召集
髭武者の　お守りは母の　写真なり　　（満州　岡田秀夫）●髭武者
砲弾の　音へ振り向く　野天風呂　　（満州　田村義夫）●砲弾
譲られし　席に白衣は　挙手の礼　　（兵庫　山田誦子）●挙手の礼
泣いてる子　いつか涙で　落書きし　　（茨城　北野玲吉）
凱旋兵　赤ん坊抱いて　写される　　（栃木　中島タミ子）●凱旋兵
年頃に　なつて娘に　さんをつけ　　（山梨　鷹羽富士夫）
おしまひに　父も乗り出す　腕相撲　　（三重　谷崎興治郎）
結局は　子に負けてゐる　親心　　（島根　竹下夏美）
豊作を　勇士に知らす　俵数　　（埼玉　八木光平）〇豊作、俵　●勇士

昭和 15 年新年号

託児所は　母をも一度　振向かせ　　（東京　小川歌子）
姑娘に　教へた羽根で　負かされる　　（福岡　市岡隆子）
万歳に　稲束を振る　通過駅　　（山形　管廼松風）〇稲束　●万歳
ねんねこの　中からも振る　紙の旗　　（愛知　みづの汀）●幼児も出征を見送る
だんだんと　父に似てくる　雪達磨　　（高知　濱田　幸雄）
帰還兵　餅を搗くにも　ある気合　　（福岡　林亀太郎）●帰還兵
礼手紙　母の言ふほど　書き切れず　　（静岡　岩井二郎）
里帰り　大きくなつた　手を見られ　　（東京　津田もみぢ）

痛かつた　バリカン母を　謝らせ　　（北海道　寺越廣信）
傷兵が　乗つて車内は　みんな立ち　　（茨城　浅岡静治）●傷兵

昭和 15 年 2 月号　P185

縫ふ影と　書く影障子　更けてゆき　　（東京　瀧澤としを）
挨拶の　長さへお辞儀　一つ足し　　（兵庫　津山信夫）
ほめられて　力にあまる　物を持ち　　（新潟　渡邊思洋）
慰問文　送つた主を　胸に書き　　（満州　菊地芳男）●慰問文
米俵　担げて嫁に　見込まれる　　（山梨　中島正美）○米俵　●男の仕事もできる嫁が望まれる
銭湯で　甲種合格　保証され　　（大阪　駒澤榮二）●甲種
虎刈に　して叱られる　日曜日　　（静岡　平岡福太郎）
陣中に　子豚など飼ふ　長期戦　　（北支派遣軍　齋田五男）●陣中、長期戦
渡河準備　手紙と人形　濡らすまい　　（北支派遣軍　徳田音司）●行軍中の兵隊の気持ち
軍事便　ゐろりのはたを　一廻り　　（群馬　須永久雄）●軍事便

昭和 15 年 3 月号　P89

有難う　ございと買つた　人が言ひ　　（香川　富士良坊）
萬歳を　父の頭で　して帰り　　（静岡　石山泰子）●萬歳
雪達磨　父に似てきて　怒られる　　（廣島　川上京一）
風船を　膨らませてやる　宣撫班　　（福岡　森本壽山人）●宣撫班（敵兵の戦意を削ぐような宣伝をする）
風向きが　変はり焚火へ　尻を向け　　（山梨　矢崎阿羅夫）
家中を　笑はす母の　もんぺぶり　　（和歌山　林公義）●もんぺ
上官に　済まないやうな　髭になり　　（東京　田島東風子）●上官
蔭膳へ　初物だよと　親心　　（長野　開吉雄）●蔭膳
子を持ちて　子のある家に　義理が出来　　（北海道　小林梢風）
傷兵に　席を譲って　子は抱かれ　　（東京　山内志正）●傷兵

昭和 15 年 4 月号　P157

これはこれは　顔に似合はぬ　隠し芸　　（福井　北島卯市）
笑つたら　もう上がらない　米俵　　（山梨　矢崎善四郎）
戦線で　覚えた歌で　麦を踏み　　（熊本　森坂清輝）○麦踏み　●戦線
押売も　出征家族　さけて行き　　（神奈川　櫻井隆司）●出征家族
腕相撲　妹の力　あなどれず　　（東京　尾加保文）
銭湯で　洗う間がない　歌自慢　　（岐阜　坪内秀男）
下駄買つて　子の歩く日を　待つてゐる　　（廣島　横堀いくを）
よく笑ふ　巡査近所の　子が懐き　　（山口　中村晃）
桑解きへ　初めて姉の　喉を聴き　　（島根　岩田天涯）○桑解き
七分衝　智慧借りに行く　水加減　　（静岡　若松千春）●節約のため完全に精米されてない米を使う

昭和 15 年 5 月号　P79

決死隊　煙草をうまく　喫ふ強さ　　（福岡　吉竹一美）●決死隊
姉さんの　見合障子へ　穴があき　　（島根　岩田正）
子の旗で　陣中に似た　野の昼餉　　（岡山　中野清志）○畑仕事中の昼食　●陣中
帰還した　八百屋いまだに　髭があり　　（東京　白銀天城）●帰還
がま口に　手を触れてみる　人だかり　　（神奈川　徳田音司）
試験場　體力章が　ものを言ひ　　（長野　有賀春信）●體力章（厚労省が強制した体力検定の結果）
もう一度　笑はせ朝の　靴を履き　　（宮崎　冨高唯義）
火打石　かうだと母は　つけて見せ　　（宮城　高橋長行）
支那の子も　入れて軍歌へ　春長閑　　（福島　佐藤喜代治）●支那、軍歌
履歴書の　尊い義手へ　すぐ決まり　　（兵庫　大川耀）●帰還した負傷兵の再就職

昭和 15 年 6 月号　P87

極秘だと　未来の妻の　写真見せ　　（中支派遣軍　渡邊正）●戦地から帰ったら結婚する予定の兵士
嬉しさは　帰還の兄へ　苗が伸び　　（神奈川　丹沢暁雨）○苗　●帰還
揉みながら　出る顔みんな　痛い顔　　（長崎　山本勝市）
新入生　『サイタサイタ』は　みんな読め　　（東京　井上微笑）
「あのねえ、　わしやかなはんよ。」と　匪賊逃げ　（廣島　高下國平）●匪賊
子ができて　初めて妻の　歌を聞き　　（東京　櫻井太平）
よい機嫌　子の溜めた釘　買つてやり　　（静岡　橋本十志雄）●子供も釘拾いで稼いでいた
気をつけへ　蝶々が何と　なく邪魔な　　（大阪　井關日出坊）
すやすやと　どの子の夢も　違ふらし　　（三重　瀧原明）
栄転に　初めて知れた　子澤山　　（大阪　飯田暁太郎）

昭和 15 年 7 月号　P121

支那の子を　抱いてわが子の　名で呼びぬ　　（岡山　黒瀬清子）●支那
姉さんの　力怒つた　時に知れ　　（東京　小杉重達磨）

押売も　根負がする　祖母の耳　　（福岡　田口富士夫）
ステッキの　先で金魚は　値切られる　　（香川　馬場浪二）
兄さんの　お古で少し　大きすぎ　　（岐阜　簑島清志）
海水着　ちと恥かしい　人に会ひ　　（北海道　黒瀬清子）
兄さんに　確と孝行　頼まれる　　（東京　白銀天城）
うららかさ　歩哨へ豚が　遊びに来　　（東京　鈴木参良）●歩哨（見張り、警戒をする兵士）
自転車に　怒鳴られている　水鉄砲　　（山梨　矢崎阿羅夫）
読みにくい　けどありがたい　母の文　　（愛媛　野地真之介）

昭和 15 年 8 月号　P91

小児科醫　癒してやつて　泣き出され　　（福井　城戸俊博）
洋装が　似合つて家に　落ち着かず　　（東京　斉藤青汀）
西瓜切る　まはりにしばし　子ら静か　　（福島　関根真砂子）
気をつけの　まま合格は　撫でられる　　（福岡　光来出不二翁）●徴兵用身体検査での風景
出せば出る　力モンペの　妻に見る　　（長崎　山本勝市）●モンペ
節米の　芋が嬉しい　握り箸　　（岡山　中野青芽）●節米
窓口へ　一萬圓の　夢の列　　（滋賀　西川敬一）
帰還した　兄は溢れる　湯を惜しみ　　（東京　小川歌子）●帰還
女房に　使われてゐる　奉公日　　（東京　尾加保文）
声自慢に　一節ねだる　大休止　　（満州　川口一）●戦地での風景

昭和 15 年９月号　P93

朝顔と　妻の笑顔へ　靴を履き　　（大分　安東正司）
人の髪　見てわが髪へ　手が上がり　　（朝鮮　青野悦子）
抱いた子に　一言言はす　電話口　　（岡山　岡本忠雄）
水番は　歩哨の姿勢　取って立ち　　（埼玉　三澤玄橘）
吊革へ　働きに行く　手が並び　　（岡山　中村和）
斥候の　這ふ先々に　支那の蟲　　（東京　瀬谷蒼美）●斥候、支那
あの髭が　部隊きつての　子煩悩　　（富山　黒田五十二）●部隊
子のくれる　物へ両手を　出してやり　　（愛知　横井恵子）
泳げない　子に泳げない　親になり　　（廣島　半田正史）
引越して　勝手の違う　月を見る　　（東京　白銀天城）

昭和１５年１０月号　P107

目と口を　鼻へ集めて　灸を据ゑ　　（廣島　後垣内岳陽）
先生の　お太鼓を見る　日曜日　　（福岡　市岡隆子）
月を見る　心になつた　留守の妻　　（北海道　柴田昌子）
忙しい　母は子の名を　みんな呼び　　（埼玉　坂東順）
蔭膳は　麦の少ない　とこを盛り　　（東京　藤原浅一郎）●蔭膳
子煩悩　支那でもすぐに　慕はれる　　（東京　伊藤進）●支那
内職の　ミシン励ます　軍事便　　（栃木　田中源）●軍事便
動物園　子を連れて来て　猿に飽き　　（愛知　久野勝）
節米へ　申しわけなき　二十貫　　（宮城　熊谷正志）●節米
新兵が　来て新しい　歌が増え　　（南支派遣軍　井口潔）●新兵

昭和１５年１１月号　P137

黙祷へ　鉢巻をとり　鍬をおき　　（山梨　矢崎阿羅夫）〇鍬　●黙祷
丸刈を　妻も見直す　男振り　　（大阪　三木武）●丸刈り
紙芝居　飛行機が来て　やり直し　　（東京　池亀昭典）●飛行機
片仮名が　読めてうるさい　子と散歩　　（山形　多田野義一）
桑摘みの　話題は今日も　軍事便　　（北支派遣軍　斧田勝治）〇桑摘み　●軍事便
帰還して　今日は見合の　髭を剃り　　（山口　中村清人）●帰還
いつからか　子に体重を　追ひ越され　　（埼玉　長濱幸洋）
子が病んで　初めて強い　妻を知り　　（兵庫　高原汀子）
人妻と　なって物価の　高いこと　　（愛知　岡田求）
子が出来て　初めて妻の　歌を聞き　　（長野　荻原久仁）

昭和 15 年 12 月号　P87

防諜を　妻子へ聞かす　軍需工　　（島根　長岡武男）●防諜、軍需工
嬉しさは　兄を負かした　貯金帳　　（栃木　児島正男）
女手に　馴れ従順な　荷つけ馬　　（兵庫　山田誦雨）
靴下の　穴から嫁を　すすめられ　　（宮城　三宅日出男）
仲人に　続くもんぺと　一分刈　　（和歌山　　谷畑善之助）●もんぺ、一分刈
稲運ぶ　遺児へ校長　声をかけ　　（島根　阿式作次郎）〇稲　●遺児
表彰は　働きぬいた　手を揃へ　　（神奈川　植邑珖次郎）
貯金箱　国債買へる　音となり　　（岡山　更井純一）●国債

日の丸を　振る子の力　背に感じ　　（廣島　前田勇）●日の丸
小孩も　竹箒でする　捧げ銃　　（北支派遣　斧田勝治）●捧げ銃

昭和 16 年新年号　P63

ピクニック　子宝部隊　振り向かれ　　（北海道　遠野亘）●子宝
回礼は　国民服で　挙手になり　　（岡山　中野青芽）●国民服
国債を　買ふ気揃って　夜なべをし　　（愛知　山村市蔵）●国債
黙祷へ　工場ひと時　しんとする　　（浦和　長濱敬子）●黙祷
片足を　編んで子供に　穿かせてみ　　（東京　西尾義人）
ままごとも　新体制で　計り売り　　（宮城　村上美他子）●新体制
非常時の　羽根はもんぺで　突いている　　（三重　長濱敬子）●もんぺ
日曜日　よい姉を持つ　二等兵　　（岡山　吉田青史）●二等兵
新体制　猫の額も　遊ばせず　　（兵庫　玉谷曜子）●新体制
蓄音機　父を送った　歌をかけ　　（香川　秋田昇）●出兵した父を送った歌

昭和 16 年二月号　P71

出来のよい　大根を誉めて　道を訊き　　（愛知　富田美雪）○大根
父征って　神へ手合はす　こと覚え　　（満州　瀧澤貞男）●父の出征
常会に　だんだん増える　坊主刈　　（茨城　谷田敷丸）●坊主刈
嫁着たがる　大陸母へ　地図を見せ　　（愛知　渡辺進）●大陸
日の丸の　真下尊い　文字ばかり　　（青森　高橋ふさを）●日の丸
荒鷲の　母とは見えず　もんぺはき　（石川　山下静二）●荒鷲、もんぺ
戦線で　覚えた歌で　子をあやし　　（高知　長森萬象）●戦線
バスを待つ　列傷兵を　前に出し　　（東京　玉川三津夫）●傷兵
風の子が　みなついて行く　出征旗　　（東京　瀬田蒼美）●出征旗
初午の　鳥居の数に　子は疲れ　　（滋賀　富山青雲子）

昭和 16 年４月号　P95

遥拝を　終へて常会　座に直り　　（山梨　矢崎新の家）●遥拝
帰還兵　畳へそつと　手を触れる　　（東京　須藤敏之）●帰還兵
国債を　買つて戻つた　咳払ひ　　（岩手　佐々木秀峯）●国債
飛行機へ　届かぬ声を　張り上げる　　（福島　大内佐市）●飛行機
クラス会　お転婆だった　日を笑ひ　　（埼玉　長島進）

妻の留守　泣く子へ影絵　見せてやり　　（京都　清水光一郎）
石地蔵　母だけ拝む　ピクニック　　（長野　眞木武）
浪花節　椅子を離れて　節となり　　（広島　高橋一美）
後任も　丸刈りで来て　親しまれ　　（北海道　柴田亜南）●丸刈り

昭和 16 年 5 月号　P117

鯉幟　差し上げた子の　誕生日　　（東京　中村山典）
敬礼が　出来て兵隊　さんが好き　　（名古屋　光岡孟水）●兵隊
子の試験　妻と鳥居の　前で会ひ　　（大阪　尾野水滴）
明日嫁が　来る顔もせず　作業服　　（大分　吉野閑）
背比べ　母は嬉しく　見おろされ　　（福岡　宗太希飼）
弁当が　もう来る時分　汗の鍬　　（北海道　星屋雄蔵）○鍬
代用食　背負わせて背負つて　野良へ行き　　（島根　山根俊美）○野良　●代用食
優等を　弾の中から　褒めて来る　　（千葉　吉野信子）●優等、弾
子宝は　一年生が　二人いる　　（栃木　小久保格三郎）●子宝
菓子包　回覧板と　取りかへこ　　（東京　青木一二）

昭和 16 年 6 月号　P89

爆音に　シャボンの着いた　手を休め　　（京都　近藤二郎）●爆音
育ち行く　子へ春嬉し　秋楽し　　（浦和　加藤未々男）
奉仕班　ぴかりぴかりと　光る鍬　　（新潟　大久保傳蔵）○鍬　●奉仕班
戦友の　床屋急がし　日曜日　　（北支派遣　赤島要蔵）●戦友
内職の　傍へ広げる　カズノホン　　（東京　谷田静枝）
生甲斐は　肌身離さぬ　故国便り　　（北支派遣　斧田勝治）●故国
子福者に　忘れるほどの　誕生日　　（群馬　野口けい子）●子福者
ピクニック　時計合はせて　駅を出る　　（香川　佐川百合）
迎への子　両手が先に　賭けて来る　　（佐賀　志田光雄）

昭和 16 年 7 月号　P141

慰問僧　髭を生やして　寺に行き　　（愛媛　石川一竿子）●慰問僧
セイラ服　武道に励む　頼もしさ　　（東京　伊藤進）●女子学生も戦闘に備える
軍事便　封を切る間に　輪が出来る　　（栃木　家富佐和子）●軍事便
日曜日　前の明地の　夫ぶり　　（福島　佐藤喜代治）○●空き地を畑にする

早起きの　子らへ兎の　箱が出来　　（島根　福田信造）
向うにも　いい声がある　田植歌　　（福岡　馬渡寛一）〇田植え歌
後を押す　車に知れる　子の力　　（愛知　水谷茂）
許婚　送った歌で　お茶を摘み　　（三重　曽根茶輔）
バリカンに　もう芸がない　子の機嫌　　（福井　岩木岩雄）
顔五つ　順に小さく　子ら眠り　　（函館　柴田昌治）

昭和 16 年 8 月号　P119

物干した　手が体操になる　よい日和　　（愛知　水野誠三）
子を抱いて　煙草の煙　天に吹き　　（長野　小島和市）
子宝の　家中写真　班に慣れ　　（兵庫　横山竹志）●子宝
空閑地　今日は女中に　指図され　　（青森　高橋ふさを）〇●空き地を畑にせよと責められる
髭剃つて　出征前の　夫になり　　（東京　小泉省司）●出征
孝行の　はじめは足を　踏んでくれ　　（岡山　中村和）
西瓜切る　廻りに子らは　息をのみ　　（愛知　藤城久子）
爆音へ　ちと持て余す　背中の子　　（熊本　野島　安義）●爆音
国策に　添ふ花嫁の　荷が極まり　　（香川　澤見　淳）●国策

昭和 16 年 9 月号　P117

子に星を　教へられてる　涼み台　　（岡山　野崎鹿尾）
這ひだした　子へ交代で　飯を食い　　（京都　青田道郎）
挨拶に　廻る花嫁　もんぺなり　　（愛媛　石川天史女）●もんぺ
涼み台　臨時常会　開けさう　　（兵庫　村上毒盃）
洋装も　三味線を弾く　慰問隊　　（満州　富久田孝一）●慰問隊
禁酒して　以来よい父　よい夫　　（栃木　山岡貴代史）
薮入の　荷に国債が　一つ増え　　（京都　西野菊）●国債
臨月の　バケツ嬉しく　叱られる　　（高松　久我剛）
腕相撲　初めて知つた　子の力　　（徳島　横山治）
いささかの　庭も今年は　薯の花　　（福島　佐野久男）●小さな庭を芋畑にする

昭和 16 年 10 月号　P89

貯金箱　帰還の夫に　まづ見せる　　（三重　木村三郎）●帰還
おめでたが　近くもんぺが　小さすぎ　　（岡山　山本丘月）●もんぺ
増産の　帰りは月に　迎へられ　　（福島　先崎康重）〇●戦争のため増産に励む
来客を　一応逃げる　簡単着　　（茨城　磯山宣子）
学問に　ほしい将棋の　よい根気　　（新潟　中村喜代治）
向ひ風　傘を軍旗の　やうに持ち　　（福岡　北島義則）●軍旗
笑ふ子へ　次ぎ次ぎ違ふ　手が伸びる　　（埼玉　新堀丸子）
挨拶に　来た新任も　丸坊主　　（岡山　小松天峡）●丸坊主
をかしさを　少女と少女　支え合ひ　　（東京　津田もみぢ）
仲人が　来ると娘は　針仕事　　（富山　寺島一夫）

昭和 16 年 11 月号　P49

産声が　早速まはる　回覧板　　（岡山　更井純一）
国債が　今夜で買へる　針仕事　　（茨城　岡田イチ）●国債
くたびれた　女の数を　持てあまし　　（山梨　望月勉）
手平を　灰皿にして　稲の出来　　（香川　芥川昇二）〇稲、灰皿にできるほど肉刺だらけの手
手の肉刺を　競ひ一家が　みな戦士　　（愛知　渡邊進）〇家族中肉刺だらけの手
リヤカーへ　母を乗せてる　うららかさ　　（新潟　大矢慶平）
平熱に　なってだんだん　叱られる　　（鳥取　大村美子）
さよならで　頭が下がる　電話口　　（滋賀　小島芳雄）
先生の　両手が足らぬ　幼稚園　　（岐阜　田口英雄）
かくれんぼ　洗濯物に　足が生え　　（千葉　江川きよし）

昭和 16 年 12 月号　P90

ラジオのと　ちゃんぽんに聞く　除夜の鐘　　（埼玉　川崎紫巒）
人の手を　借りずに出来た　薯の味　　（静岡　川島まさ子）〇●自分で作ってみた芋
こんな字も　覚えたらしい　子の便り　　（満州　長濱幸次郎）●軍事便
明日嫁が　来る顔もせず　挙手の礼　　（愛知　柴田千冬）●挙手の礼
子の指を　みんな頬張る　母の愛　　（愛知　松原郡二）
制服の　子も手伝って　籾を干し　　（滋賀　富山青雲子）〇籾
農繁期　陣中に似た　髭も見え　　（岡山　中野青芽）〇農繁期　●陣中
米俵　胸の辺りで　出る力　　（長崎　山本勝市）〇米俵
勤労の　汗一つづつ　陽を抱き　　（茨城　木村互助）

昭和 17 年新年号

新米は　手に受けて見て　誉めるもの　　（兵庫　岩崎千禾穂）〇新米
国策に　添ふ花嫁の　荷が極まり　　（栃木　義煎敏寛）●国策
母の打つ　切り火再起の　背に感じ　　（鳥取　佐々木好）
豆債権　買ふ気の針が　よく動き　　（鳥取　福庭梅晃）●債権
薯を掘る　姿の義足　とは見えず　　（大分　安藤新）〇●義足の帰還兵が畑仕事をしている
アルバムへ　ふと戦友の　笑ふ顔　　（福島　石田虹人）●戦友
米みんな　捧げて納屋を　広く掃き　　（山梨　名取長秋）〇米
嬉しさを　袂で隠す　齢になり　　（和歌山　妹背利雄）
いい息子　持って九段へ　五つ紋　　（埼玉　田島愛助）●九段

昭和 17 年 2 月号　P100

子宝を　誉めて取り巻く　写真班　　（山梨　市橋幸一）●子宝、写真班
今日もまた　竹筒が鳴る　貯金の子　　（滋賀　西川喜三郎）●貯金
子を妻へ　返すニュースの　時間なり　　（熊本　春田節雄）
百姓に　生きてよかった　検査場　　（秋田　土田健一郎）〇百姓　●身体検査
鍬だこを　見合いひの膝の　置き所　　（岡山　滋賀利行）〇鍬だこ
生還の　勇士と見えぬ　低い腰　　（香川　久家剛）●勇士
連れた子に　教えてもらふ　新兵器　　（岡山　妻鹿整）
故郷の　歌に更けてる　いい露栄　　（満州　板谷章平）●露栄
肩揉めば　居眠る母の　無事な顔　　（香川　林道子）
バスを待つ　列を笑って　強い足　　（東京　小泉省司）

昭和 17 年 3 月号

野良のお茶　三々九度の　やうに注ぎ　　（長崎　山口秀雄）〇野良
あやされる　子よりも笑ふ　あやす親　　（愛知　林亘）
号外の　一行もよし　勝ち戦　　（福井　瀧淵良治）●勝ち戦
悪戯で　困る寝顔と　思われず　　（滋賀　諏訪安茂）
回覧板　後から親が　付いて行き　　（栃木　渡邊末吉）
大安も　仏滅もなく　日が決まり　　（埼玉　斉藤良雨）
戦友を　野良まで妹　連れてくる　　（山梨　望月武美）●戦友
慰問団　勇士と同じ　髭になり　　（福島　小椋喜代治）●慰問団、勇士
よくしゃべる　客もニュースに　負けて聞き　　（三重　岡本花子）●戦争のニュース
紙芝居　大人もために　なる話　　（岡山　三宅綾子）

昭和 17 年 4 月号

常会を　して子宝を　数えられ　　（福島　佐藤喜代治）●子宝
噛む口を　一緒に止める　快ニュース　　（埼玉　上原秀夫）●戦勝のニュース
ハイキング　もんぺの娘に　追い抜かれ　　（香川　森鎌初榮）●もんぺ
帰還兵　弾より怖い　見合ひの日　　（石川　山下静二）●帰還兵
増産の　掌胼胝があり　よい火皿　　（千葉　宮田しづか）〇●戦争のための増産
にんにくも　我慢して食ふ　協和心　　（満州　畑明天）●協和心
帰還して　今日は母校の　台に立ち　　（石川　吉光政雄）●帰還
博士への　希望師を説き　親を説き　　（大阪　岩本葉知郎）
軍事便　片手で読んで　取る手綱　　（兵庫　藤井奈美夫）●軍事便

昭和 17 年 5 月号

孝行の　はじめは足を　踏んでくれ　　（新潟　久住清治）
皇軍に　感謝しながら　毬をつき　　（長野　小岩春雄）●皇軍
丸々と　種痘の腕を　誉められる　（北海道　星屋雄蔵）
じつとして　をられぬ軍艦　マーチ聞く　　（鳥取　今村勇治郎）●軍艦
勤労で　うまいと知つた　水を飲む　　（栃木　伊藤晃作）
拓子村　今日もどこかで　子が産まれ　　（愛知　加納輝夫）●拓子村
親よりも　子が知っている　占領地　　（福井　田畑芳雄）●占領地
万歳を　しつかと支ふ　爪の先　　（満州　越智孤柳）●万歳
椰子に樹つ　日の丸捕虜に　眩しすぎ　　（栃木　小暮きよし）●日の丸、捕虜

昭和 17 年 6 月号　P84

常会が　万歳になる　よいニュース　　（愛知　柴田専一）●万歳
痛かつた　机の角を　母叱り　　（三重　曽根茶輔）
子と風呂に　行けば軍艦　湯に浮かび　　（香川　宗海正）●軍艦
鰐の背も　飛んで皇軍　勝ち進む　　（愛知　白陶山人）●皇軍
灸すえて　百面相を　子に見られ　　（静岡　鈴木福太郎）
もんぺ隊　みんな倅の　嫁に見え　　（栃木　遠藤青火）●もんぺ
山賊の　やうにキャンプは　火を囲み　　（岐阜　河原成明）
飛行機が　来てやり直す　紙芝居　　（京都　萩山勉）●飛行機
麦の出来　誉めて貯金を　奨めに来　　（石川　野市正二）〇麦　●貯金の奨励

慰問文　入れてやりたい　鳥の声　　（静岡　金原明）●慰問文

昭和 17 年 7 月号　P94

家中の　箸で末っ子　よく太り　　（栃木　伊東晃作）
手のまめも　堅さを増して　減る明地　　（京都　片山俊雄）○●戦争のため空き地を畑に
帰省して　よき父を知り　母を知り　　（満州　綾野博）
子の描いた　絵はみな敵機　燃えている　　（茨城　龍造寺ひさし）●敵機
子守唄　父は軍歌の　ほか知らず　　（新潟　牧野忠平）●軍歌
投票の　父に代つて　水車踏む　　（福岡　西森蝸牛）
味噌汁の　匂ひへ戻る　朝稽古　　（富山　南登良雄）
熱心に　捕虜も覚える　アイウエオ　　（鳥取　佐々木好朗）●捕虜
白粉を　落としてからの　貯金箱　　（岡山　中村和）●貯金
飯事も　判と配給　券を持ち　　（群馬　二宮鶴治郎）●配給

昭和 17 年 8 月号　Ｐ９２

食べさせる　ご飯天使も　口をあき　　（広島　古田敏夫）
客の下駄　また軍艦に　なって浮き　　（北海道　西村なか）●軍艦
昼休み　臨時ニュースで　長くなり　　（岩手　小野寺永喜）●戦争の臨時ニュースに聞き入る
盆踊り　月も丸いが　輪も丸い　　（茨城　西浦子）
逞しい　帰還の力　田に生かし　　（朝鮮　青野一元）○●帰還兵が畑仕事
長期戦　ですと見せ合ふ　靴の穴　　（樺太　松村三男）●長期戦
おむすびは　肩身が狭い　汽車の中　　（長野　佐々木良作）●白米は贅沢だ、という風潮
伸子張り　コスモスよけた　位置にする　　（京都　井上フサエ）
奉仕隊　過ぎたお礼に　恥かしく　　（愛知　柴田専一）●奉仕隊
乙姫の　肝が潰れた　大戦果　　（佐賀　篠原流光）●ミッドウェー海戦

昭和 17 年 9 月号　P64

子の寝言　うっかり夜業　返事する　　（宮城　加藤章）
令嬢と　思えぬ奉仕　班の汗　　（愛媛　渡邊進）●奉仕班
日の丸が　立てば島の名　みな変わり　　（埼玉　新堀アサヒ）●日の丸
お喜び　言はれ切符も　ふやされる　　（静岡　小木春代）●子が増えて配給が増える
里帰り　大きな口で　母と食べ　　（奈良　森嶋富榮）
叱られた　日はつけてない　日記帳　　（静岡　深澤敏誠）

孝行の　初めは父と　母の肩　　（福島　加瀬義一）
田植歌　嫁は軍歌の　方が得手　　（愛知　大見魯公）○田植え歌　●軍歌
防火槽　金魚を飼って　国土無事　　（栃木　山国貴代史）●防火槽

昭和 17 年 10 月号

ご隠居へ　眼鏡を添へる　大戦果　　（福岡　手島吾郎）●大戦果
畑にして　庭の廣さが　いまわかり　　（北海道　富岡幸男）○●庭も畑にする
封筒の　裏を活かして　長期戦　　（鳥取　森本静江）●長期戦
君もかと　肩叩き合ふ　点呼場　　（埼玉　新堀　旭）●徴兵の点呼場
黙祷は　一家の肩を　ならばせる　　（岐阜　浅井宗平）●黙祷
病んでみて　知るお見舞の　むづかしさ　　（樺太　齋藤正秋）
髪かたち　より手の肉刺へ　先に惚れ　　（福島　箱崎辰巳）○肉刺
後任は　丸刈できて　親しまれ　　（秋田　齋藤行男）●丸刈
勲章を　くれとも言へず　子は見惚れ　　（大阪　筒井義信）●勲章
昨日きた　嫁とは見えず　モンペはき　　（島根　毛利忠義）●モンペ

昭和 17 年 11 月号

教壇で　飴はいらない　紙芝居　　（和歌山　小林俊夫）
刈り上げた　日の夕焼けを　夫婦で見　　（徳島　肥野重夫）
銃執らぬ　妻十月目に　ご奉公　　（島根　小笠原正義）●銃、子供を産むことが国への奉公
軍事便　父は煙草に　火をつけず　　（福島　佐藤喜代治）●軍事便
米俵　甲種の腕は　軽く上げ　　（埼玉　金井政一）○米俵　●甲種
村中が　ひげ面になる　農繁期　　（群馬　浦部秋子）○農繁期
新婚の　旅行をやめて　畦を踏む　　（群馬　剣持房子）○●贅沢をせずに農作業に励む
国債の　列にお巡り　さんもゐる　　（滋賀　河原岩男）●国債
一枚の　地図では足りぬ　大戦果　　（福島　村山亘）●大戦果
恥かしい　献金とても　感謝され　　（岡山　三宅繁満）●献金

昭和 17 年 12 月号

日の丸に　留守を頼んで　肩に鍬　　（新潟　竹内謙介）○鍬　●日の丸
嫁が来て　賑やかになる　壁の影　　（香川　土谷勉）
紙芝居　猫も見ている　塀の上　　（岐阜　辻仙次郎）
増産へ　女子供と　言へぬ出来　　（山梨　？島充寿）○●男性が徴兵されても女性と子供で増産に励む

読みにくい　けどありがたい　母の文　　（長野　水上かずゑ）
焼けた芋　先に出た手が　勝となり　　（福岡　小松親之助）
時間聞く　祖母にわからぬ　十八時　　（秋田　打矢利市）
大根引き　母の尻餅　笑はれず　　（群馬　安屋盛太郎）〇大根
馬鹿にした　子の債権が　大当り　　（岡山　山本丘月）
蔭膳へ　障子明けてる　稲の出来　　（長野　土屋ナツヨ）〇稲　●蔭膳

昭和 18 年新年号　P68・69

模型機が　明日を待つてる　枕元　　（福井　伊藤軍治）
二十四時　数へる父も　指を折り　　（長野　山口重義）
応召の　軍馬は尻を　見送られ　　（長野　横山貞治）●応召、軍馬
農繁期　俵に知れる　子の力　　（静岡　市川賢一）〇農繁期
子宝が　知れる障子の　穴の数　　（埼玉　駒井清次）●子宝
雨宿り　焦げつく秋刀魚　気にかかり　　（静岡　伊藤新作）
日本の　母に神棚　ある強み　　（廣島　江田進亮）
遺児の肩　叩いて首相　声やさし　　（福岡　永野秀吉）●遺児
父さんの　手を奪ひ合ふ　ハイキング　　（岐阜　浅井宗平）
看護婦へ　自慢で見せる　左文字　　（東京　赤羽ただし）●利き腕が傷ついた兵隊

昭和 18 年 2 月号　P84・85

蔭膳へ　産婆が告げる　男の子　　（滋賀　洞浅雄）●蔭膳
子宝の　子の中どれが　若ざくら　　（福島　土橋澄）●子宝、若ざくら
鶏に　礼を言ひ言ひ　卵取り　　（徳島　柳雪）
見せてから　刈りたい一種　添へてあり　　（北満　堀田操）〇自慢の出来の作物
花嫁の　満座を？す　健康美　　（茨城　増子薫八）
殊勲甲　むらへはるばる　カメラ来る　　（東京　相原富夫）●殊勲甲
朝体へ　番号の声　ありつたけ　　（群馬　松本繁光）
将軍に　やや似た父の　戦闘帽　　（岐阜　横井一葉子）●戦闘帽
這へば立て　みたみの一人と　母の愛　　（東京　村井すみ子）●赤ちゃんが兵隊になる日を願う
居候　かうしておれぬ　大戦果　　（愛媛　徳本富子）●大戦果

昭和 18 年 3 月号

笑ふ子を　あやしはじめて　止められず　　（宮城　加藤千枝子）
食事訓　済んで一度に　動く箸　　（愛知　谷川興三郎）
軍服の　写真が見てる　手内職　　（朝鮮　青野一元）●軍服
薙刀の　肩で火叩き　勇ましい　　（三重　山本慶机）●薙刀
腕時計　ちとむづかしい　二十二時　　（福岡　大久保忠）
常会の　やうに子福者　火を囲み　　（東京　井上光夫）●子福者
先生の　手を奪ひ合ふ　昼休み　　（奈良　奥本千寿子）

昭和 18 年 4 月号

寒いなと　言へば叱られる　アリューシャン　　（埼玉　田中哲男）●アリューシャン
ソロモンが　はっきり見える　蟲眼鏡　　（福島　磯部九郎太）●ソロモン諸島への侵攻
巻の一　読めて四月が　待ちきれず　　（山形　後藤智）
二三日　野良で楽しむ　軍事便　　（長野　砂田哈爾）〇野良　●軍事便
子宝が　知れる物干　竿の数　　（茨城　佐川幸重）●子宝
遮断機へ　山から続く　炭の列　　（山梨　金丸什伍）
子煩悩　らしい巡査へ　茶が入り　　（静岡　春蟹朗）

昭和 18 年 6 月号

大戦果　炭焼く黒い　手が上り　　（朝鮮　兼田勝）●大戦果
百點の　中で戦地へ　何か編み　　（静岡　春蟹朗）●戦地
表彰に　肉刺の出てゐる　手を揃へ　　（千葉　山中嵯嘉恵）〇●増産に励んだ農家に表彰
常会を　ちと狭くする　供出米　　（秋田　亀井正左衛門）〇●供出米
片仮名の　手紙漢字で　返って来　　（埼玉　荻野安美）●子の慰問文に返事が届く
拓士村　春が来る来る　嫁が来る　　（満州国　堀田三砂）●拓士村
おめでたい　届け新妻　赤くなり　　（山梨　中村行雄）

昭和 18 年 7 月号

子の軍歌　みんな木の棒　差してゐる　　（新潟　水落佐一郎）●軍歌
畦に泣く　子へ張りきつた　乳房来る　　（愛知　都築三千子）〇畦
献金に　村長の礼　痛み入り　　（青森　岩崎清英）●献金
遺児たちへ　東條さんの　手の温味　　（鳥取　久保田篤雄）●遺児
腹の子へ　電車の席が　譲られる　　（満州　横山一次）
戦地から　つけられた名で　よく育ち　　（北海道　松尾秀夫）●戦地
増産へ　馬も使へる　嫁になり　　（神奈川　清水俊夫）〇●夫が徴兵されても嫁が増産に励む

昭和 18 年 8 月号

振袖を　やめて体が　軽くなり　　（山形　柴田金五郎）●節約のため振袖をやめる
先生も　生徒もシャツに　継ぎがあり　　（北海道　大城義市）●節約のため服に継ぎをして着る
奉仕隊　ヨイショヨイショで　麦を刈り　　（鹿児島　砂田早美）○麦　●奉仕隊
軍事便　一人で読んで　叱られる　　（宮城　加藤章）●軍事便
一粒の　米の手数を　子に教へ　　（栃木　菊地探琳）
子の相撲　二人出てくる　双葉山　　（秋田　今野正一）
託児所の　わが子ずつしり　手に応え　　（東京　小林信夫）
出産の　電話私用も　憚らず　　（群馬　芳林テウ）

昭和 18 年９月号　Ｐ47

常会は　月誉めあつて　から別れ　　（群馬　木部長次）
野良仕事　負けて喜ぶ　嫁の父　　（埼玉　長谷萬五郎）○野良仕事
植えながら　北の護りも　言い聞かせ　　（石川　吉光政雄）○田植え　●北の護り
国の幸　はちきれさうな　妻となり　　（秋田　橋本義雄）●子供を産むことが国への奉公
帰還して　支那語で母を　まごつかせ　　（福島　遠藤勇男）●帰還、支那
畑にして　庭の良さが　今わかり　　（長野　水上保政）○●増産のため庭を畑にする

昭和 18 年 10 月号　Ｐ27

捷報に　馬もいななく　秋日和　　（埼玉　宇田川宇平）●捷報
妹の　侮り難き　貯金帳　　（大阪　曾原武春）
慰問団　勇士に負けぬ　髭になり　　（神奈川　荒井貢）●慰問団、勇士
模型機に　一日つぶす　親の愛　　（福島　佐藤美代子）
豊作を　仮名で書かせる　針仕事　　（樺太　熊谷悠紀夫）○豊作
背くらべ　母は嬉しく　見おろされ　　（千葉　山中嵯嘉恵）
いたづらの　頃を言われる　壁の傷　　（香川　西山高男）

昭和 18 年 11 月号　Ｐ39

増産へ　按摩もうまい　嫁となり　　（千葉　岩城栄）○●戦争のための増産
大戦果　箸と茶碗を　差し上げる　　（満州国　小杉竹千代）●大戦果
体操に　揃ってよろし　シャツのつぎ　　（鹿児島　本吉貞二郎）●つぎ
供出の　車ほんとに　重い音　　（高知　橋詰金林庵）○●供出
惜しげなく　袖切る嫁の　美しさ　　（秋田　打矢利市）●節約のため袖を切る
病める子へ　木の剣差した　慰問来る　　（京都　秋野鈴蟲）●慰問
背に腹に　両手に母と　いう誇り　　（静岡　花島喜久夫）●子供を産むことが国への奉公

昭和 18 年 12 月号　Ｐ22

よい息子　持つて九段へ　五つ紋　　（千葉　山中嵯嘉恵）●九段
増産と　知つて案山子も　よく見張り　　（埼玉　佐藤達夫）○●戦争のための増産
肉刺の手を　灰皿にする　野良仕事　　（宮城　佐藤護）○野良仕事
親切な　声が大きい　帰還兵　　（新潟　ツハラ新一）●帰還兵
小休止　煙草次ぎ次ぎ　火が移り　　（満州派遣軍　大久保傳蔵）●戦地での休憩
見合ひの子　黒く育てた　甲斐があり　　（山形　清野久）
許婚　らしい便りは　後向き　　（愛媛　長野眞佐子）

昭和 19 年 1 月号　Ｐ53

吊革の　左も右も　働く手　　（岐阜　林喜兵衛）
隠居など　してはいられぬ　巻脚絆　　（三重　宇城飛鳥）
芋御飯　歯のない母に　喜ばれ　　（秋田　土田昭夫）●節約
慰問品　はみだすまでは　詰めてみる　　（新潟　砂山昭二）●慰問品
物干へ　生まれたらしい　昨日今日　　（東京　井上光夫）
妻の声　初めて知つた　焼夷弾　　（北海道　松尾秀夫）●焼夷弾
大戦果　姑の肩を　揉みながら　　（千葉　山中嵯嘉恵）●大戦果

昭和 19 年 2 月号　Ｐ43

子の機嫌　抱き手二人が　待っている　　（新潟　川本春男）
母みんな　戦う野良へ　送り出し　　（郡馬　木部長次）○野良　●子供をみんな出征させた
雪投げに　子の気強さが　気づかはれ　　（滋賀　佐川文子）
内職の　音も書き込む　軍事便　　（高地　橋詰金林庵）●軍事便
腹の子へ　弾の中から　名をつける　　（京都　中北三津夫）●弾
征つた夫の　軍手大きく　薪を割り　　（秋田　浅利なき子）●出征
大声に　驚きすくむ　面会所　　（福島　磯部九郎太）●面会所

昭和 19 年 3 月号　P23

爆弾も　受け止める気で　もんぺ立ち　　（山口　弘中あや子）●爆弾、もんぺ
日参の　母に鳩まで　慣れてくる　　（石川　中村文）
背の子の　手紙戦地へ　トンと落ち　　（京都　中北光男）●戦地
見合ひの娘　強く育てた　甲斐があり　　（島根　奈良久男）
子宝で　座る場がない　囲炉裏ばた　　（鹿児島　今村英新）●子宝
月光が　みんなにそそぐ　慰問文　　（広島　福禄喜三郎）●慰問文
御目出度も　近くもんぺが　小さすぎ　　（岩手　中野時子）●もんぺ

昭和 19 年４月号　P49

面会に　母は恥ぢらふ　人を連れ　　（北海道　長野努）●面会
仲人を　小さくはさむ　健康美　　（福島　西宮院遊子）
肉刺の手で　米英撃てる　切手買う　　（佐賀　小ヶ倉征光）〇肉刺　●売り上げは軍事費になる切手
転業して　子をぶらさげる　力瘤　　（山形　加藤重雄）
酒と袖　断つてうれしい　共稼ぎ　　（東京　小杉重雄）
儀禮章　激しく揺れて　獅子吼する　　（福岡　長野鬼面）●儀禮章
弁当の　片手見送る　旗を持ち　　（福岡　手島吾郎）●出征を見送る

昭和 19 年 5 月号　P39

体操の　汗にハンマーの　汗続く　　（徳島　田中政雄）〇ハンマー
供出の　車と知つて　子等も押し　　（島根　大塚）〇●供出
慰問文　まだ見ぬ顔を　夢に見る　　（中支軍　植原明）●慰問文
種痘の子　腕の太さも　褒められる　　（愛媛　石川一兵）
木銃を　突き出す姉の　決戦美　　（北海道　大城武夫）●木銃
子の寝顔　それでおいしい　特配酒　　（前橋　若林とらを）●特配酒
空守る　砂水梯子　家の武器　　（茨城　出澤雅敏）●空襲に備える

昭和 19 年 6 月号　P31

後輩は　七つ釦を　胴上げする　　（山形　会田保男）●七つ釦（予科練の制服）
予科練の　志願逆立ち　うまくなり　　（鳥取　山県篤夫）●予科練
内職へ　笑顔で渡す　軍事便　　（長野　小林昭子）●軍事便
娘の馬耕　父の驚く　顔うれし　　（茨城　深澤タキ）〇●女性も進んで農作業をする
よいお腹　いきなり席を　譲られる　　（徳島　日下宇之助）
疎開して　一度に増える　孫の顔　　（新潟　橋本彦市）●疎開
袖裁つて　もう春風に　用はない　　（三重　瀧原あきら）●節約のため袖を切る

昭和 19 年 7 月号　P35

腹の子へ　手を貸すバスの　女助手　　（島根　長岡久徳）
応召の　軍馬は尻を　見送られ　　（京都　上手弘）●応召、軍馬
泣かした子　泣かされた子が　嫁になり　　（群馬　木部長次）
バリカンの　悲鳴戦友　入れ替り　　（満州派遣軍　大久保傳蔵）●戦友
弁当を　並べて母の　朝せはし　　（三重　中濱秀子）
待ちに待つ　便り嬉しく　胸に抱き　　（兵庫　藤田文江）
勤労の　子らに大きい　握り飯　　（埼玉　宇田川宇平）

昭和 19 年 8 月号　P32

うしろから　前から早苗　投げられる　　（秋田　小松三榮）〇早苗
奉仕旗へ　御苦労様と　月が出る　　（福岡　平島吾郎）●奉仕旗
疎開の荷　重さも撃たむ　顔で引き　　（福島　佐藤茂夫）●疎開
バスの列　笑いもんぺの　強い足　　（長野　小林徳明）●もんぺ
当たり籤　御国へすまぬ　やうな顔　　（香川　平井ユズル）●売り上げは軍事費になる宝くじ
託児所に　なってお寺も　農繁期　　（静岡　熊岡武夫）〇農繁期
予科練の　歌子について　針仕事　　（富山　川畑仁男）●予科練

昭和 19 年 9 月号　P43（ひょうさん）

父のかく　鼾明日への　底力　　（群馬　若林登良夫）
内職の　母へ管灯　丸く落ち　　（富山　田向秀）●管灯
麦畑　案山子も旗で　激励す　　（埼玉　榎本千代子）〇●戦争のため増産に励む
菜園の　胡瓜とトマト　手をつなぎ　　（熊本　小島千代子）〇菜園
前線は　手真似口真似　忙しい　　（緬甸派遣　西田政治）●前線
子が泣いて　一人はづれる　田植笠　　（秋田　森本茂）〇田植笠
晴天の　一機へ背なの　子が勇み　　（和歌山　安達福美）●軍機
増産は　月に送られ　迎へられ　　（山梨　鈴木重國）〇●戦争のため増産に励む

昭和 19 年 10 月号　P43（ひょうさん）

黒一点　紅にまじつた　事務机　　（徳島　田中政雄）●多くの男性は出征して会社にいない
頬かむり　祖開の妻も　くにに慣れ　　（鳥取　山縣芳郎）●疎開
娘の決意　勝つために母　動かされ　　（東京　福島永榮）●戦争に勝つための決意
面会の　母にはちきれ　さうな挙手　　（栃木　町井いし子）●面会
子宝の　後押す力　よくわかり　　（福井　井筒一三）●子宝
戦友の　ようには刈れぬ　子の頭　　（長野　三井荘平）●戦友

昭和 19 年 11 月号　P43（ひょうさん）

増産を　ほめに出てきた　丸い月　　（広島　片松光蔵）○●戦争のため増産に励む
一年の　農家の汗を　噛みしめる　　（佐賀　手島吾郎）○農家
帰省した　七つボタンの　よい姿勢　　（大分　加藤賚作）●七つボタン
荒鷲に　なる逆立ちは　親もほめ　　（三重　大島菊子）●荒鷲
頬かむり　取れば住持の　丸い顔　　（香川　桂眞隆）
肥かつぐ　母が選んで　くれた嫁　　（群馬　若林登良夫）○肥かつぎ

昭和 19 年 12 月号　P43（ひょうさん）

鶏と　起きつくらに　勝ち皆勤とう　　（小財四郎）
リヤカーに　家中乗せる　うららかさ　　（高知　橋詰金林庵）○リヤカー
ありがとう　休む日のない　空の音　　（岐阜　永田祥治）●軍機の音
回覧板　声から先に　届けられ　　（香川　桂眞隆）
夢で見る　母はいつでも　水仕事　　（福岡　手島吾郎）
子ができて　もんぺの紐を　長くする　　（北海道　野瀬貞男）●もんぺ
丸窓も　今は夜業の　影法師　　（大分　鶴見いでゆ）

昭和 20 年新年号、3 月号（2，3 月合併号）、戦時版第一号（4，5 月合併号）、戦時版第二号（6 月号）、10 月号において川柳の掲載なし。
昭和 20 年 11 月号　P16（裏表紙）
女でも　いいさいいさと　実家の母　　（凡太郎）
旅帰り　土産の上を　さはらせる　　（牟風子）
初対面　名刺と顔を　見くらべる　　（峰の犀）
これだけの　野菜へ主婦と　しての知恵　　（選者）